

三 開拓地の拡大

1 開拓線の前進

日高の沿岸は明治以前において漁業移住者の定着をみ、明治初年においても大量の漁民が入地した。しかし内陸の農業移住は明治三年佐藤太に入つた仙台士民を以てはじめてする。以来静内(四年)西舎村(四年)狄伏(一五年)ルベシベ(一八年)等は集団として経営を得て全道的に知られ又管内開拓の核心となり、これ等の諸点から開拓の波がひろがった。

明治二十年以降は北海道庁の拓政当を得、農業に対する科学的研究も実用の域に達し、一方国内情勢は大量の移民を本道に送り出すこととなつて、本道の開拓盛期を現出した。日高もその例にもあるものではなく、殊に氣候の温和を以て知られ、先住者も多い関係上特に開拓北陸の移民を吸収することが多かつた。しかし距離近く自然条件の近似する南部津軽人の移住は個々に不斷に行われて、量的には最も多い。

日高の地形は、日高山脈よりその傾斜に沿うて流下する多くの平行流によつて特色づけられている。移民はこれらの河川の入口にもつとも早く入地し、やがて次に来るものはそれよりやゝ奥地に落付き、第三次のものは一そう不便な山間に定着する等はほ一定の順序がみられる。今、各地の沿革を検討してみると、少くとも数戸の和人が入地して部落意識をもち共同経営の動きをみせたと考えられる。

明治十一——二十年度の開拓地域は平取静内狄伏西舎村白等に深く入りこんで先進村落の所在を示しているがその地域は狭少である。二十一——三十年になると沙流川及び貫氣別川に有力な開拓者八田清次郎の小作地が開拓前線をなし、門別村においては山門別、波恵、慶能舞、賀張の優良村落が開かれた。静内郡の小沢にも二三の村落が出来たが、三石川及び亀舞川の沿岸に大村が形成され、

三 開拓地の拡大

一〇九

第三編 拓殖進展

一一〇

殊に歌笛村の誕生(二十三年)は記念すべきものであつた。三十一年より四十年に至る間は、先づ右左府盆地が植民地としてクローゾアツプし、やがて一村として独立する素地を開いた。貫氣別川と厚別川の開拓者は双方よりすすんで遂に上流において合流し、様似川と幌瀧川の上流盆地にも開拓の鉄が振られた。共に交通難や霜害、土壌不良などになやまされ、遂に開拓の夢もやぶれ、学校も閉鎖し、あけて退去したオナルシベ(大泉)のごときすらあつた。

しかしながら明治末年に至るまで、開拓線は急速に沿岸より近い肥沃地を覆いつゝ日高山脈の峡谷部に達し、一応好適の地は開墾しつくされたのである。ただその開拓は単に処女地のもてる肥料分を掠奪する畑作と低い生活に甘んずる当時の移民の気質によつて推進された荒削りな開拓であつたと言ひ得られる。

2 沙流川沿岸の開発

所謂沙流谷は古来アイヌの故郷として多くのコタンがあつた。はじめて平取に足跡を印した和人は寛政十年の近藤重蔵であつた。安政二年には松浦武四郎が山川取調のため鶴川筋より幌去に出て川に沿うて下り、貫氣別川を溯つてナヌニ(三和)へ山越えしていった。又明治五年開拓使の一瀬朝春は当時部落の北限であつた幌去から一里標を建てつゝ宇佐津富(日高村)に入つて第十標をたて占冠へ越していった。このルートはアイヌに知られてはいたが、一類はこれを踏査した最初の和人であつた。

明治十年前後の鹿猟盛期には獵人と皮買の群はこの河谷を前進しやがて銃砲の音は十勝に遠のいていった。この仕事に従つた人々は若干名コタンにすみついてアイヌ相手の営業によつて蓄財し有力者となつた。

旧陸軍参謀本部が假製五万分の一地形図測量のために入地したのは二十七年頃であり、道庁地理課の実測五万分の一地形図なども二十九年に完成して印刷発行され、この地方の地形の概要は漸く人に知られるようになった。この頃空知川の支流十裂別(金山に近い)に豊富な砂金床が発見され、小さいながらゴールドラッシュを現出した。ここに至る門戸は沙流川であり、採金者の往来がみられ又住民の中にも出稼ぎするものもあつた。盛業期には二百人以上の入稼者があつたといわれる。

沙流川沿岸開拓表

部落名	明治31年戸数表			明治31年和人数	郷国別	最初に入地した人々			備考	
	和人数	アイヌ計	和入率			年度	身分	来路		現地での業
佐賀大平	169	14	183	99%	仙台・淡路	3	開墾士族	仙台より	農	掘浦多平 鹿野長三郎 風間源作 日曲久助 一一一
平賀	19	32	51	37	阿波・淡路	3	土族庇者	南部より	農	
荷葉嶺	4	12	16	40	同上 同上	35	農業移住者	淡路より	農	
紫雲古津	10	28	38	36	阿波	24	不明	滋賀より	商業	
荷葉	13	29	42	31	兵庫	2	農民?	不明	半農半猟	
平原	20	57	77	36	兵庫 岩手 宮城	3	農事指導員	新潟	半農半商	
二風谷	8	45	53	15	兵庫	25	教員	不明	教員半農	
荷負	6	52	58	10	淡路	16	半農半商人	門別より	皮買・酒屋	
長知内	5	17	22	24	兵庫	30	開墾士族	駒内より	牧場主	
貫気別	6	15	21	29	仙台	24	不明	佐渡より	商業	
去	6	40	46	13	淡路	17	不明	平取より	農	
三葉 春部 右府 左露 千	明治31年に住民なし									

三開拓地の拡大

第三編 拓殖進展

アイヌは鹿資源の枯渇によつて窮乏し、十九年以降各部落を整理して帰農にとめたが、必ずしも成功したとは言えない。旧来通り夏は漁場を下つて働き或は和人にやとわれて跡査案内、伐木、牧夫、伝令などに従い、冬は閑居又は猟に出ていくらかの現金を入手するのが通例であつた。

平取より奥地に入地した草分け和人はアイヌ相手の商人が多い。これら商人の足場は門別であり、したがつて飯田前川等近江商人の力がつよく働いたことをみのがすことはできない。

明治十四年平取に牧場を開いた工藤作助について二十四年八田満次郎が静内の有力者父権逸のもとを去つて雄図を抱いて貫気別川の奥地に入つて牧畜と開墾に従い、又同年アイヌの居住者もない幌去フレナイの地に同様起業し、この方面の開墾に大きな力となつた。当時のなやみの最大なものは道路難であつた。八田等は協力して道路の改修にとめた。生産物は駄馬によつて門別に搬出したが、運搬費が嵩み不利であつた。このため牧畜に力を入れるものが多く、各地に自由放牧が行われ、時に隊の放飼も流行した。アイヌの中にも有力な馬持があつた。

医師の招聘、学校の設置についても住民の少なからぬ努力があり又プラウ耕の普及のためには佐瑠太の修理者を平取にまねく等の熱意も扱われた。

明治三十一年の洪水は全道的な稀有の出水であつたが、沙流川沿岸は特に被害甚大であつた。

◎明治三十一年洪水の概況

- (一) 札幌(三一年九月六―八日、降雨四六時二五分一五七mm坪当二五八七六二)
- (二) 十国四三郡一区二十町三百三十村大凡二百方里に被害
- (三) 出水に多少の差異あるも六日夜半より七日午前の間に溢水した
- (四) 全道に死者二四八、流失家屋三、五五一、浸水二四、〇〇〇戸、浸水五四、五〇〇町

(四) 日高の被害

郡	項目	浸水家屋	内床上浸水	流失	潰屋	溺死	流失田	同	畑
静内郡		一〇二	七〇	四	一	〇	〇		四〇八町四〇
新冠郡		九六	七四	三	〇	〇	〇		三八八町三一
沙流郡		一五三	一二六	五四	一〇一	二九	八町		一、七三八町〇六二
合計		三五二	二七〇	六一	一〇二	二九	八町		二、五三四町六八二

— 明治三十一年北海道洪水概況、北海道庁 —

この洪水によつて佐羅太移民は多くの離散者を生じ、残留者は悲壮な決意のもとに心立社なるものを組織して再起を誓い、自から握飯を腰に寄附を募つて築堤に取りかゝつた。新しい町は洪水を恐れて東方高台の上につくられた。平賀村のアイヌは低地をすてて川東の火山灰台地に移つた。この地の地力はいくばくもなくかれて困難な営農に直面しなければならなかつた。また同村の和人四戸は貫気別の八田牧場に救いをもとめて移動した。荷葉村の仲山清作も川東のシリ台地に移つて草分けとなり後に精農となつた。荷負では洪水におどろいたアイヌは更に一段高いホビガエ台地に移つた。またこれまで台地耕作はかえりみるものがなかつたが、福与卯市等がはじめて之をころみアイヌの間にも普及した。

幌去の八田牧場より奥地には右左府の峽谷があつて、到底移民の足の踏み入れられるところではなかつた。しかるに開拓の気運はようやくこの奥地にも及んで、明治三十五年ウサツプ、イワチン面原野に殖民地区画測設が行われ、その殖民地図も発表された。

三十八年七月平取戸長小島卓三を団長とする四十余名の右左府視察団が平取を發した。岩知志以北は全く笹をわけて僅かに進み、岡春郡(富岡)においては小島戸長危く溺死しようとする構事におどろきつゝ、辛うじて盆地に到達したが、あまりの交通不便さに失

三 開拓地の拡大

一一三

第三編 拓殖進展

一一四

望し、僅かに敢然入地を言明したのは風間源作等三名に過ぎなかつた。

この地に測量隊の入地したところはまさに日露開戦のときで銃床材のタルミの需要がさかんであつた。これをもとめてウサツプ、チロロの山間に入る杣夫があつた。三十四年には既に鉄道は空知河谷の金山に通じ、占冠中央は三十三年殖民地区画を了し、三十五年佐藤農場の集団入植があつて、この方面の開拓熱は旺盛であつた。したがつて銃床材の搬出等も占冠を通つて金山に出たものである。栗沢村の人自由久助は占冠の先輩の口添によつて、三十八年九月アイヌを道案内として平取より右左府に入りさらにチロロの地況の良好をみとめて独り定住した。目曲は米嗜日用品をすべて占冠にあおぎ、半農半杣の生活を送つた。風間は一旦帰村し三十九年十二月再度入地して小屋掛をなし、四十年二月同志二十五名と共にアイヌ担夫二十八名を連れてウサツプに移住した。しかし最初の数年は同志の離散しきりで、いかに開拓者精神の旺盛なものにとつても、苦しい思い出を残した。四十二年には二十戸に達し十二月に字校をもうけ、駅通も設置されて、村を安定させる仕事はようやく軌道にのることを得た。

3 人口の増加

日高に於ける最も古い人口統計は明治六年のもので総人口六、一三七人でこれは全道人口の五%を占めるものであつた。その構成は和人一、一〇〇人(八%)土人五、〇三七人(八二%)で、日高の人口の主流はアイヌ人が圧倒的であつた。明治十四年に至つて総人口九、六〇五となり和人四、二五三人土人五、三五二人となつて、その割合は甚だ接近して来た。その年の人口を各郡別にみると、沙流、新冠の二郡は土人が圧倒的で、静内、三石、浦河の三郡は和人もかなり多いが土人が上位にある。様似、幌泉の両郡は逆に土人は極めて少く和人が多く殊に幌泉郡の和人は全和人の三分の一をこえていた。

明治三十年における人口は二万台に達しているが、全道人口に対する比例数は二・七%に低下し、他の諸支庁の人口充実が更に著しいことを示している。この時の人口は浦河郡が著しく優勢であつて、西舎村日狹伏の諸藩村が発展し浦河市街も行政、漁業の中心として、戸数三百に近く、市街を表通裏通隣別通りとし、支庁、区裁判所、警察署、税務署、郵便電信局、漁業組合、小学校、燈台、

駅通等があり、小売商五十余戸、古物商八、旅人宿八、回漕店二、料理店貸座敷八、酒造業二、その他当時としては中心集落として整つたものであつた。幌泉も古い集落であるが浦河に勢力をうばわれて稍衰状を呈してはいたが、漁夫の入稼多く、市街約百八十戸、商家半を占め内料理屋十二、貸座敷二、寄席一、旅人宿七等のあるのをみれば当時の繁栄を推しうる。様似は市街七十余戸、焼布(三石)六十戸、下々方(静内)二、三十戸、門別四十戸、佐留太(富川)四十戸等が主なる集落でそれぞれの地方の中心として生長してあつた。

アイヌ人口は集計に困難なものであるが、つねに五千乃至六千の間を往来して、著しい増減はない。しかし地域的には幌泉郡様似郡の減少は著しい。即ち幌泉郡では明治十年以前は人口百をこえていたが、三十年には七百二十人にすぎなくなつた。明治三十一年殖民地状況報文は「吾国ノアイヌハ其戸口多クシテ昔時ニ在テハ比較的請負人の虚使ヲ免レ其後和人ノ移住スルニ及ヒテモ亦劣敗ノ度小ナク且早ク和人ニ接シテ多少其生活ニ慣レ又平生内部ニ住シテ疾疫天災等ノ憂少ナカリシニヨリテ増殖ノ結果ヲ生センナラン」と西部アイヌ人口の減少しないことを説明し又アイヌと和人との混血は一乃至二割で、他國のごとく甚だしくないと述べている。

明治2	5,048
6	5,289
11	5,909
21	5,919
26	6,065
31	6,333
41	6,312
大正2	6,698
7	5,821
12	5,067
15	5,194

明治三十年以降は農業開拓の盛期を現出し移住者が増加し又自然増加も著しいから、明治四十年に三万台となり、明治の末年には四万台に接近した。しかし全道に対する比例数はさらに低下して、むしろ人口増加の微弱な支庁となつた。

三 開拓地の拡大

第三編 拓殖進展

日高人口表

年度	人口	全道人口 に対する 比例数
明治 6	6,137	5.0%
14	9,605	4.0
16	9,601	3.7
19	11,727	3.8
25	15,388	3.0
30	21,555	2.7
35	25,528	2.4
40	31,120	2.2
45	39,452	2.3
大正 5	42,192	2.1
9	48,789	2.1
14	51,674	2.1
昭和 3	52,136	2.1
6	60,972	2.2
10	75,388	2.4

住民の郷国についてはアイヌの多いのは当然であるが、之について淡路が多く仙台これにつづき、歴史的な集団移民の功績が大きくなっている。さらに東北の地理的に近接している諸県も多い(概ね明治三十年現在)

郷国別主なる居住地表

郡名	居住地	住民の主なる郷国別
沙流	沙流川沿岸 門別川	アイヌ及び陸前、淡路の移民 原野にはアイヌ、淡路の民、市街は近江人

幌泉	波蕙川 "	越後、越中の移民
様似	慶能舞川 "	加賀の移民
浦河	賀張川 "	淡路の移民
三石	厚別川沿岸	アイヌ及び淡路、越中の移民
静内三石	新冠川 "	アイヌ及び淡路、安芸の移民
静内	染退川 "	アイヌ及び淡路の移民
"	捫別川 "	アイヌ及び淡路の移民
"	布江川 "	アイヌ及安芸、但馬の移民
"	三石川 "	アイヌ及び淡路、陸中の移民
"	覺舞川 "	アイヌ及び越前、淡路の移民
"	元浦川 "	アイヌ及び越前、但馬の移民
"	海岸一帯	陸中、陸奥、但馬の移民
"	幌別川沿岸	アイヌ及び肥前、肥後、阿波、安芸の移民
"	海岸一帯	陸中、陸奥の移民
"	様似川沿岸	アイヌ及び越中、越前の移民
"	海岸一帯	陸中、陸奥、羽後の移民

三 開拓地の拡大

第三編 拓殖進展

4 耕地の拡大

日高の耕地は、明治五年に田五畝（沙流菅根藩移民開墾）畑約五二六町で、内仙台佐瑠太移民二七町、静内稲田移民三五町、西舎杵臼移民三二町、沙流菅根藩民十町等が主なる和人の開墾地で、他の約四百町歩はアイヌの耕地であった。但しアイヌは年々耕地をかえるため、概略の推計である。

明治十四年になつて田五町、畑三九八町計四〇三町に増加したが、その率は低い。増加が急カーブを示しはじめたのは北海道庁が国有未開地の処分を行いだしてからで、特に十年計画時代の三十三年より四十二年までは最も多かつた。日高では三十五年を頂点としてその後一時減少し以後また増加している。

明治三十年においては、耕地六、八五八町歩に達し、「川岸ノ沃野ハ概ネ開墾シテ進シテ泥炭湿地若シタハ高台地ノ新墾ニ着手」するに至つた。また幌泉方面は開墾古く土地やせて放棄するものもふとめられた。

郡	墾成反別	主要農作地
沙流	一、四二五・八	沙流、門別、厚別、波蕙、慶能舞、賀張各川沿岸
新冠	三八三・三	新冠川沿岸及厚別川東岸
静内	一、三五三・八	染退、捫別両川沿岸及布江川西岸
三石	一、〇二四・九	覺舞、三石両川沿岸及布江川東岸
浦河	一、七八三・八	元浦河、幌別、向別、絵笛四川の沿岸
様似	六二二・八	様似川沿岸

幌 泉	二六四・二	台地及び溪流の沿岸
計	六、八五七・七	殆んど各川沿岸の地は開耕す

米の始作は石狩と共に早い、その面積は二十九年においても僅かに二十四町歩に過ぎず、三十五年土功組合法が発布され、積極的な造田政策がとられるに至つてやつと八十四町歩に達した。しかし全道的な米作熱に伴つてその後水田は急増し、明治末年には三七七町歩に達した。耕地面積の二％にすぎないが、収益上よりみても注入労働力の上からみても、面積以上の地位を獲得したことはたしかである。

日高における耕地の増加を全道的にみると、その比率は人口よりは上廻つてゐるが、その歩みはほとんど同じであつて逐年低率となつてゐる。即ち他の支庁の増加が更に著しかったことを示している。

日高の耕地表

	田	畑	計
明治14	0.5	398	399
19	11	1,636	1,647
24	6	2,519	2,525
29	24	5,990	6,014
34	84	10,664	10,748
39	201	16,098	16,299
44	377	19,751	20,128
大正 5	696	24,922	25,618
10	2,994	24,164	27,158
昭和 1	4,736	17,631	22,367
5	5,445	15,201	20,746
10	?		
15	?		
20	3,700	12,048	15,748
25	?		

三 開拓地の拡大

第三編 拓殖進展

四 産業の発達

1 畑作の盛期

明治五年の農作物中和人にあつては大小豆、大角豆、粟、蕎麥、馬鈴薯が主であり、アイヌは稗、粟、馬鈴薯等であつた。のちには自給食糧のみでなく換金作物を導入しようとし大麻、あい、漆等を加え養蚕にもつとめた。これは耕牛が利用されたこと等と思ひあわせて、内地延長主義の経営を行つたことがわかる。

二十四年になるとブラウ耕が普及し、耕馬も大型となり作物消流の途も開けたので、大小豆を主なる販売作物とする北海道的な経営となつた。農産の重なるものは小豆とし大豆これに亞ぐ。農家は一般に之を発売して以て一家の維持の費用に供し、粟、蕎麥等は単に自家食用の資に充るのみ、是れ小豆は他の雑穀に比し販路自在に価格貴きに由る（北海道通覽）

◎明治二十四年統計

大豆	三、二九二石	小豆	六、九八九石
玉蜀黍	六八四石	粟	一、三二八石
そば	四四五石	大麦	六三三石
裸麦	九九八石	馬鈴薯	五三一、六六二貫

明治三十年においては、大豆が首位をしめ小豆が次位となるほか、燕麥一四〇町があたらしくあらわれ、末期の二時的なことではあつたが、西舎方面に藍六十一町歩が栽培され、なたね、たばこが試作された。

◎明治三十年統計